

神戸学院大学中国語教育の展望

—共通教育機構初年度の現状—

The Future of Chinese Language Studies in Kobe Gakuin University

— the situation after the first year of the General
Education Course —

中 山 文	・ 大 西 紀
Fumi Nakayama	Osamu Onishi
李 玲	・ 池 田 磨 左 文
Li Ling	Masafumi Ikeda
和 田 知	久
	Tomohisa Wada

序にかえて

第一章 「みんなの中国語 第一步」による達成度分析

—— テスト結果にみる新教科書の効果と問題点

第二章 中国語入門会話 I について

第三章 中国語中級 I (検定クラス) の現状と成果報告

第四章 中国語総合クラスの現状と将来展望

結び

序にかえて

中山 文

共通教育機構が始まり 1 年がすぎようとしている。文部省の縛りが残る総合リハビリテーション学部以外の全学部では、2007 年度入学の 1 年生に向けては新カリキュラムが、2 回生以上はこれまでの教養総合コース（旧カリ）が行なわれている。つまり、現在は新カリと旧カリが平行している過渡期である。本論では新カリにおける 1 回生用中国語新プログラムと、2 回生以上の旧カリ用プログラムの現状と成果についての報告を行なう。

新カリキュラムにおいて、われわれは「全学統一テキストの変更」と「入門会話クラスの設定」という以下の二つの新しい試みを行なった。本論の第一章では、これまでのテキスト「中国語基礎の基礎 I」から「みんなの中国語 第一步」への移行が学生の学力にどのように変化を及ぼしたか

を、期末試験の成績結果から考察する。第二章は旧カリキュラムにはなかった入門会話クラスの授業がどのように運営され、どれほどの効果が上がっているかの報告である。第三章、第四章では旧カリキュラムの中国語中級Ⅰ・Ⅱ（検定クラス）、中国語総合Ⅰ・Ⅱについて現状報告を行なう。

2007年度からは順に新カリキュラムの中で上級生用のプログラムが立ち上がっていいく。旧カリキュラムでの反省をふまえて、より効果的なプログラム作成への参考としたい。

第一章 「みんなの中国語 第一步」による達成度分析 —— テスト結果にみる新教科書の効果と問題点

大西 紀

0 はじめに

今年度から中国語初級クラスでは新教科書「みんなの中国語 第一步」を使用することになった。新教科書は昨年度まで使用していた「中国語 基礎の基礎」の問題点を解消するべく編んだ教科書である。その問題点とは、文法項目の難易度のばらつき、文を紹介するだけで語句・単語の説明がなかったことである。それは前年度のテスト分析においても指摘した。新教科書では文法項目は中国語検定試験準4級出題文型に絞り、語句・単語に語釈を付したばかりでなく、「語句から文へ」という項目を加え、文は語句によって積み木のように積み上げられ成り立っていることを受講者に意識づける工夫も施した。

さて、新教科書の効果が果たして如何ほどのものであったのか。昨年度と同様の試験問題形式、ほぼ同様の難易度でテストを作成した。これは昨年との比較をし易くするためである。また問題種によっては「温情」を廃し、昨年より難易度を高めている。作成時には昨年度と同じく平均点は6割を想定していた。私見ではあるが、平均点が6割を下回るテスト結果は教科書、教員の質を問われている、あるいは受講生とのミスマッチを指摘できる。結果は以下の通りになった。

2007年度 受験人数1366、満点60、最高点58点、最低点17点、平均41.3点、標準偏差7.59、分散57.7

2006年度 受験人数1409、満点60、最高点56点、最低点12点、平均35.8点、標準偏差8.25、分散68.1

平均点は41.3点（得点率68.83%）であり、昨年度35.8点（同59.66%）と較べても大きく上昇した。最低点も5点前年を上回っている。前年度使用教科書に較べ、紹介した文型を準4級出題文型に絞ったことが功を奏したと思われる。その検定試験の合格点は6割であることから、受講生の平均点はすでに合格圏内にある。テスト結果だけをみると新教科書の効果が挙がっていることがわかる。次に前年とどのような差が出ているのか具体的に検証してみたい。

1 テスト分析—昨年度との比較と問題点

1) テスト結果に対する分析

今年度のテスト問題は昨年度との比較検証を行うために、問題種は昨年度とほぼ同様にした。以

下に問題種を示す。

2007 年度

I	[1]–[5]	(各 1 点 × 5 問)	簡体字正誤問題
II	[6]–[10]	(各 1 点 × 5 問)	語句の日本語訳
III	[11]–[15]	(各 1 点 × 5 問)	語句の中国語訳
IV	[16]–[17]	(各 2 点 × 2 問)	語句の発音と意味双方を回答
V	[18]–[20]	(各 2 点 × 3 問)	書き換え問題
VI	[21]–[29]	(各 1 点 × 9 問)	中国語文の空欄補充
VII	[30]–[35]	(各 1 点 × 6 問)	中国語文の語順整序
VIII	[36]–[40]	(各 2 点 × 5 問)	文章の日本語訳
IX	[41]–[50]	(各 1 点 × 10 問)	1 音節語、2 音節語の聞き取り（ヒアリング）

2006 年度

I	[1]–[3]	(各 2 点 × 3 問)	簡体字正誤問題
II	[4]–[8]	(各 1 点 × 5 問)	語句の日本語訳
III	[9]–[13]	(各 1 点 × 5 問)	語句の中国語訳
IV	[14]–[15]	(各 2 点 × 2 問)	語句の発音と意味双方を回答
V	[16]–[29]	(各 1 点 × 14 問)	中国語文の空欄補充
VI	[30]–[35]	(各 1 点 × 6 問)	中国語文の語順整序
VII	[36]–[40]	(各 2 点 × 5 問)	文章の日本語訳
VIII	[41]–[50]	(各 1 点 × 10 問)	1 音節語、2 音節語の聞き取り（ヒアリング）

出題意図等は前稿に記したので本稿では割愛する。上掲のように昨年度との違いは「V」の「書き換え問題」である。新教科書では「書き換え練習」が毎課付され、実践力の向上を図っているので、その効果を測るために出題した。

次に各問題種別の得点率を下に挙げる。

	正答率平均	前年正答率平均	対前年比
I [1]–[5] (各 1 点 × 5 問)	79.46%	38.15%	208.28%
II [6]–[10] (各 1 点 × 5 問)	88.94%	68.20%	130.41%
III [11]–[15] (各 1 点 × 5 問)	65.50%	53.94%	121.43%
IV [16]–[17] (各 2 点 × 2 問)	72.95%	71.50%	102.02%
V [18]–[20] (各 2 点 × 3 問)	63.95%	—	—
VI [21]–[29] (各 1 点 × 9 問)	79.68%	63.56%	125.36%
VII [30]–[35] (各 1 点 × 6 問)	70.45%	42.43%	166.04%
VIII [36]–[40] (各 2 点 × 5 問)	70.58%	87.86%	80.33%
IX [41]–[50] (各 1 点 × 10 問)	47.38%	47.04%	100.72%

今年度の問題種別の正答率だけを見ると、やはりIXのヒアリング問題が大きく落ち込み、IIはほぼ90%、VI、Iがほぼ80%の高率となっている。対前年比で見ると、VIII以外は全て前年を上回っており、概ね良好な結果となっている。

特に前年度正答率ランキング最下位に位置していたI「簡体字正誤問題」と最下位から二番目のVII「中国語文の語順整序」が対前年比で208%、166%とその正答率が倍増、1.6倍増になっていることが際立つ。教科書巻末に薄墨で書かれた漢字をなぞる「なぞり書き」のコーナーを設けたこと、積み木式に文の構成を印象付けた項目「語句から文へ」の効果が表れたと考えたい。

逆に正答率が対前年比マイナスに落ち込んだVIII「文章の日本語訳」については、昨年度より難易度の高い問題を配したので、致し方ない結果と言えよう。しかし、問題作成時の想定正答率7割はかろうじて上回ったことを評価したい。

さて、個別の問題ではどのようにになっているのか。下に問題別正答率ランキングを掲げる。

前年度は正答率90%以上の問題は3問しかなかつたのに比して、今年度は全50問中20%を占める10問が90%以上の正答率となっている。中でも、「工作」(仕事)の意味を問うた〔6〕の正答率が99.1%、同じ問題種の「回家」(家に帰る)98.9%と非常に高い正答率を示した。日本語と同じ字を使いながら意味は異なる同形意義語については昨年度も高率を示した。「回家」は前年度も出題しており、正答率は74.3%であった。それに比して24.6ポイントも正答率が高まったことは受講生の中国語学習へ意欲の高さと評価したい。今年度の正答率の高さは、語句の意味にまで注意が至っていないという前年度の懸念を大いに払拭した。空欄補充問題の〔21〕も98%を越え、マークミス等を考慮に入れると、これら三問については受講生全員が正解したと言っても過言ではない。また前年度は正答率平均38.15%と低率であった問題種I(簡体字正誤問題)からも〔1〕「書」、〔2〕「東」が正答率90%以上を記録し、受講生の簡体字への意識が高まっていることを表していると言えよう。

問題別正答率ランキング

順位	問題番号	種類	正答率
1	〔6〕	II	99.1
2	〔9〕	II	98.9
3	〔21〕	VI	98.3
4	〔39〕	VIII	96.6
5	〔25〕	VI	95.2
6	〔13〕	III	93.3
7	〔2〕	I	92.5
8	〔1〕	I	92.3
9	〔36〕	VIII	92.0
10	〔22〕	VI	91.0
11	〔10〕	II	89.4
12	〔23〕	VI	88.0
13	〔8〕	II	87.3
14	〔45〕	IX	85.9
15	〔26〕	VI	84.7

2) テスト結果に見る教科書の問題点

平均点の向上、高正答率問題の増加、新教科書の効果は十分にあがっているのではないだろうか。しかし、問題点も指摘しなければ文責を果たしているとは言えない。まず、問題別正答率下位ランキングを見てみよう。

まず、昨年度のテストでは 29.9% 以下の問題は 6 問あった。今年度は半減し 3 問に減っている。ランキング 36 位の問題の正答率は昨年度が 47.3% に対し、今年度は 57.5% と 10 ポイント以上上回っている。下位ランキングを見ても新教科書によるボトムアップが図られていることがわかる。

下位ランキングの問題種別構成はヒアリング問題 IX 5 問、和訳問題 VIII 3 問、空欄補充問題 V 2 問、語句の中国語訳 III 2 問、語順整序問題 VII 1 問、簡体字正誤判別問題 I 1 問となっている。ヒアリング問題と和訳問題で下位ランキングの半分を占めた結果となった。

ヒアリング問題が 5 問下位ランキングに入っている。

これは学期始めに学習したきり、その後単音節の聞き取り等の練習が行われなかつたことに起因すると思われる。発音学習が終わってからも、授業中時間を割いて受講生の注意を喚起するようにしなければ正答率のアップは望めないだろう。教科書編集の際に一層の工夫が必要であったかと思われる。

また和訳問題が三問も下位ランキングに入ったことはいささか意外であった。昨年度は平均点の向上を図るために難易度の低い問題を集中させた。しかし、今年度の出題は学生の意識が教科書の細部にまで及んでいるかを見るため、基本例文以外からまさしく「重箱の隅をつつく」ような難問を配した。難易度を高めた結果が如実に表れたと言えよう。

今年度は受講生の回答状況がわかるように、選択肢ごとに何人の受講生が選択したか集計を採った。以下、その集計結果を踏まえ、テスト作成者として気になった問題について何問か取り上げ検討したい。

問題種 I [5]

「漢」の簡体字を問うた。「漢字」の漢であるばかりか、中国語は「漢語」というので受講生には是非覚えて欲しい漢字である。簡体字は「さんずい」+「又」となる。しかし、この問題の正答率は問題種 I の正答率平均が 79.46% であるにもかかわらず、57.1% と大きく落ち込んだ。この問題種で一番高い正答率であった [2] 「東」は 92.5% であるから、35.4 ポイントもの乖離を示している。受講者の回答状況を見ると以下のようになっている。

選択肢 1 209 人 (15.3%) 同 2 296 人 (21.7%) 同 3 780 人 (57.1%) 同 4 77 人 (5.6%)

選択肢 1、2 には共に「ごんべん」を使った誤字を配していた。その誤答を 37% (計 505 人) もの受講生が正答として選択したのである。同種の他の問題では細心の注意が見られただけに残念な結果となった。中国語では「ごんべん」は簡略化され、「さんずい」に若干似ている。この点については「なぞり書き」だけでは不十分だという結果が得られたので、授業中の板書で注意を促し、さらに教員も板書する際「さんずい」なのか「ごんべん」なのかはっきり書き分ける意識を持たな

問題別正答率下位ランキング

順位	問題番号	種類	正答率 (%)
50	[42]	IX	16.1
49	[44]	IX	20.6
48	[43]	V	26.7
47	[15]	III	32.7
46	[49]	VIII	32.8
45	[19]	V	34.2
44	[41]	IX	39.8
43	[40]	VIII	46.8
42	[37]	VIII	51.0
41	[30]	VII	52.5
40	[24]	VI	52.9
39	[48]	IX	53.4
38	[12]	III	53.7
37	[5]	I	57.1
36	[47]	IX	57.5

くてはいけないだろう。

問題種III [15]

「何週間？」の中国語訳を尋ねた問題である。正答率は32.7%と低率であった。

選択肢1 426人(31.2%) 同2 204人(14.9%) 同3 284人(20.8%) 同4 446人(32.7%)

正答率の低さもさることながら、四つの選択肢が満遍なく受講生の回答を集めた結果となっていることが注目される。選択肢には1「星期幾?」、2「幾星期?」、3「星期幾個?」、4「幾個星期?」をそれぞれ配した。正解は選択肢4である。1は(何曜日?)、2は教科書では紹介しておらず、3は混乱を誘う選択肢であった。1と4は他学でも混同の傾向があり、今後その違いを授業中に意識づける工夫が必要と思われる。教科書でもこれらの語句を羅列、紹介するに留まらず、練習問題を附して語句の意味を徹底させる必要があろう。ただ、問題種III [11]で出題した「来週の木曜日」(下星期四)は難問であるにもかかわらず73.2%と正答率が高かった。この問題から類推して「星期幾?」は(何曜日?)と判断できたのではないだろうか。そうすれば、[15]の正答率はこれほど低率にはならなかっただろう。受講生にも冷静な思考を求めたい。

問題種V [19]

この問題では「我要吃面包。」(私はパンを食べたい。)の否定文を聞いた。単純に「要」の前に否定副詞「不」を置くと誤答となる。教科書は「× 我不要吃面包。」と注意を喚起している。結果はどうなったのか。

選択肢1 467人(34.3%) 同2 737人(54.0%) 同3 56(4.1%) 同4 104(7.6%)

正解は選択肢1であり、誤答の同2を大きく下回った。教科書に責を求めるのなら、「× 我不要吃面包。」という表記に視覚的効果が足りなかったのではないか。また、教科書ではstep1「練習】3-2に「我想吃面包。」を漢字で書き、同4-2で否定文に書き換える問題を附した。ここに「我要吃面包。」を否定文に書き換えさせる問題を配していたなら結果は違ったものになったのではないだろうか。初級の段階では必ずマスターして欲しい文法事項の一つであるだけに再考の必要が認められる。

問題種VI [24]

「あなたの辞書は机の上にあります。」という中国語の文には動詞「在」を使うのか、「有」を使うのかを訊いた。「机の上には鉛筆が一本ある」であれば「有」を使うが、主語が「あなたの辞書」であるから、「在」が正解となる。これも解答状況を見ると、受講生の選択は「在」と「有」の二つに大きく分かれている。

選択肢1「在」722人(52.9%) 同2「有」627人(45.9%) 同3「是」8人(0.6%) 同4「很」4人(0.3%)

上の状況を見ると、僅ながら正答「在」が上回っている結果になっていることがわかる。初級の段階ではどちらも日本語訳が「ある」となるので混乱が生じる文法項目ではあるが、重要な項目

だけに遺憾な結果となった。教科書では「在」を先に紹介し、同課で続けて「有」を紹介した。「机の上には鉛筆が一本ある」の中国語文の下には（×「在」）と但し書きを附してある。ただ、「在」の項目では未出の「有」が紹介できなかった。テスト結果を見ると「在」、「有」を紹介した後に二文を対比させるような工夫が必要なのではないかと感じた。

以上幾つかの問題を抽出し、教科書の問題点を探った。選択肢の回答状況により様々な教科書の不備、受講生の弱点を知ることが出来た。まずはテスト結果によって問題の所在を明らかにできたのではないかと思う。それをどう解決していくは今後の検討課題として残った。

2 ま と め

新教科書「みんなの中国語・第一歩」を利用した初めてのテストは、概ね良好な結果を得ることができた。それは対前年比において顕著である。8割以上の高得点を記録した受講生は23%（昨年度7.45%）にもなり、4割を下回った受講生は全体の1.61%（昨年度9.08%）に過ぎない。テストの難易度は昨年とほぼ同様、もしくは昨年を上回っている訳であるから、平均点も大幅（対前年比115.3%）に上昇したことは新教科書には積極的な評価が下されよう。それと同時に受講生の高い学習意欲も評価したい。しかし、新教科書には上述のように問題点も多く含んでいる。すでに多くの同僚より貴重なご意見を賜っているが、今後更なる検討、修正を加え、より良い教科書に進化することを望みたい。

第二章 中国語入門会話について

李 玲

中国語入門会話I・IIは今年度から新しく開設された科目で、今までの初級中国語I・IIa bと同様に初めて中国語を学習する学生を対象とするものである。

初級中国語I・IIa bは発音を重視するため、授業中は時間をかけて、発音を練習するのである。それに対して、中国語入門会話I・IIは少人数制で（一クラスの定員は25名）、学生に中国語を聞く・話すという実践のチャンスを与え、文字通り、学生の会話能力の向上を目指とする授業である。

そのため、実際の中国語入門会話Iの授業では、あくまでゆっくりと丁寧に少人数で一人ずつ正しい発音を身につける指導を心掛けている。そして、中国語入門会話IIの授業では、教科書で習った文法と文型を活かし、学生に自己紹介や自由会話、中文日訳、日文中訳など自分の生活に即した実践練習の数々を試みている。それは徐々に中国語の塊として、学生が表現出来る範囲を広げることに寄与できると考えている。

学生に漸進的且つ確実に一定の中国語を聞く・話す能力を身につけさせるために、一年生では中国語入門会話I・IIを、二年生では、中国語基礎会話I・IIを、そして、三年生では中国語会話I・IIを設けることになっている。その意味で、中国語入門会話I・IIは一年間で終了する授業としてではなく、三年間の学習プランの一環として捉える必要がある。語学の勉強においては、発音

やリスニング、会話などは言うまでもなく重要視すべきであるが、母国語にない語感や発想を身につけることで、会話や表現に趣を深めることができる。したがって、授業中、学生に丁寧に発音を指導し、聴く能力と会話能力を伸ばすことに力を入れると同時に、一年生の時点から学生に中国語の感覚を少しづつ身につけさせることを心掛けている。たとえば、「人称代名詞」を勉強するときに、日本語と中国語の間の「人称代名詞の代用」という現象の有無を通して日中間の発想の違いに触れてみる。日本で、「僕、ご飯食べたか」、「彼女、どこへ行く」、などをよく耳にすることが出来る。しかし、中国語にはこのような表現が見当たらない。

日本人は農耕民族で、昔から土地を中心に村落が定着される。村民は先祖代々、同じ村落に住み着き、同じ村の村民は農業等の共同作業等を通じて村落の一体感ができているため、各々勝手なことは出来ない。勝手な行動を取れば、「村八分」にされ、生存の危機にさらされる。というわけで、同じ村落に暮らしている人々は、何か行動をしようとする前に、まず回りの人々の気持ちや立場を考えなければならない。つまり、「我が身をつねって人の痛さを知れ」とか、「以心伝心」などのような言葉が生まれる所以である。このような気持ちが人称代名詞に反映されると、「代用」という現象が生まれる。それに対して、中国の文化は農耕文化と遊牧文化の融合であり、その上、中国人の大多数を占めているのは漢民族であるとはいうものの、单一民族国家ではなく、多民族国家である。それぞれの民族が自分の文字や独自の言語、特有の価値観をもっている。民族の融合によって他民族とコミュニケーションを取らざるを得ないことになると、相手に自分の考え方や意見、主張などを常にストレートに表現しなければ、正しく理解してもらい難い。したがって、中国語の表現は日本語と違って、遠回しの表現が少なく、まっすぐな表現を特徴とする。しかも、民族の自他を常に意識した上での中中国語なので、代名詞の代用という現象が見あたらない。

一年足らずの授業であるが、次のような感想を持っている。

評価できると思われるところ

① 学生の勉強意欲を引き出すことができたところ

この授業を開設するという発想はきわめて斬新なアイディアである。授業は少人数制で、学生の自主性を促し、学生はそれによってさらに学習の意欲を持つようになる。

② この授業と初級中国語 I・IIa bとの相互補完

この授業を選択した学生のほとんどは初級中国語 I・IIa bも選択している。二科目の使用している教科書が違うにもかかわらず、両方の授業の内容、とりわけ文法面において似通うところがあるので、学生の話では、片方の授業で消化しきれないものを、もう一方の授業を受けることによって相互に補完でき、若しくは片方の授業すでに理解した内容でも、もう一方の授業で再確認することによって、それについての理解をさらに深められるとのことである。

③ 少人数制であることのメリット

中国語入門会話 I・IIの定員は 25 名とされているため、少人数制で、学生に発音してもらう時に、誰がどこでどう間違っているのかすぐにわかるので、その場で訂正することができる。また、学生は発音と会話を繰り返して練習することによって、基礎をしっかりと作ることができ、授業を

真面目に聞こうとする姿勢が自然に身に付いていく。多くの学生は中国語の勉強に興味を持ちはじめ、積極的に授業に参加するようになった。

改善する余地があると思われるところ

① 成績の評価方法

中国語入門会話の成績評価は、平常点は 60% で、定期試験は 40% の構成である。学生の授業態度についての評価は言うまでもなく大切だが、学習成果が問われる定期試験の全体に占める比率が低過ぎるようと思われる。

私の場合、前期の時、平常点は出席状況と授業態度で評価していた。定期試験の時は 40 点満点で出題していた。中に、テストがわずか 10 点しか取っていない学生が、平常点はほぼ満点なので、結局、合格してしまったケースがある。また、学生のほとんどが普段真面目に授業に臨んでいるので、平常点はほぼ同じであり、定期試験の 40 点で学生に優劣をつけるのがなかなか難しく、結局履修生の成績はほぼ同じレベルになってしまった。したがって、来年度から総合評価に占める定期試験の比率を考え直す必要があるのではないかと思う。

また、他の担当者からは、授業自身は入門会話なので、テスト形式は筆記試験ではなく会話の形でも良いのではないかという提案があった。さらに、学習意欲を刺激し成績を公平に評価するという意味で、テストを共同で行ってはどうかという提案もあった。

② 授業の進度

中国語入門会話の四クラスは、前期はほぼシラバス通りに進めていた。後期のシラバスには一週間に付き 1 課のペースで進むと書いてあるが、実際は四クラスとも三週間に 2 課、又は二週間に 1 課のペースでしか進まなかった。それは週一回の授業だけでは、学習内容の定着度が低いのではないかという懸念があるからである。少し工夫すれば、規定の時間内に予定していた内容を終らせることが出来るが、問題は、教えた内容の復習時間がなくなることである。進度を求め過ぎると、学生は毎週新たな単語、会話、文法、漢字を覚えなければならなくなり、会話実践が全く出来なくなる。

また、入門会話は最初からネイティブの先生が担当し、授業の時すべて中国語を使用するという設定であったが、実際一年生の前期の授業では、すべて中国語を使用するのは、かなり無理なところがあるため、ピンインを勉強すると同時に、教室用語 50 を学生に教えていた。後期の授業では、教室用語 50 を使用すると同時に、文法関連のことばを教える。そのねらいは、二年生時に、授業の時ほぼ半分ぐらい中国語を使用ところにある。それをベースに、三年生時に授業中、完全に中国語を使用することを目指している。

③ 担当者間の事前打ち合わせ

それぞれの先生には、それぞれの長所がある。授業の進度を保たせると同時に、それぞれの先生の長所を最大限に発揮させ、先生方がそれぞれの知恵を出し合い、協力し合う環境を作ることも、全体の授業の円滑な進行にとって、重要である。そのため、年に一度でも、担当者間の意見交換や打ち合わせの場を設ける必要があるのではないかと思う。

④ 履修登録したにも関わらず、一度も出席したことのない学生

中国語入門会話の履修登録をした際、希望者が 200 名前後であったが、定員が 100 名であったため、結局、約 100 名の学生が履修希望にもかかわらず、履修を断念したようである。

私の授業では、登録していたとはいえ、一度も授業に出席しない学生が二クラスでおよそ 10 名以上に達している。来年度の履修登録の際、このような事態にならないよう関係者に呼びかけてほしい。

付 記

私は中国語入門会話を二クラス持っている。二クラスの 33 人の学生を対象に無記名形式で授業の評価すべきところと改善する余地のあるところについてのアンケートをとった。学生の意見が今後の授業改善にきわめて参考になると思うので、それを下記の表にまとめた。

評価すべきところ	① 単なる文法だけでなく、ピンイン練習と会話実践を中心とする授業なので、日常でも使える言葉をたくさん習うことができる。	11人
	② 授業の中で、先生がなるべく中国語で喋ってくれたりして、リスニングの練習になるし、中国語に慣れることができる。	11人
	③ 少人数制で分かりやすく、じっくりと練習する時間がある。	10人
	④ 発音が間違えば、すぐはっきりと言ってくれて、曖昧にすまさないで、しっかりと身に付いていている気がする。	9人
	⑤ 初級中国語と同時進行しているので、復習になって、理解しやすい。	7人
	⑥ 説明が分かりやすい。質問などをしやすい感じ。	6人
	⑦ ほどよいペースで授業が進む。	5人
	⑧ 発音や聴力がかなり身に付いた。	4人
	⑨ ネイティブな中国語に触れることができる。	3人
	⑩ 教科書通りのことだけでなく、中国のこと、文化、生活なども紹介してくれる。	2人
	⑪ 先生との距離が近い。	1人
改善すべきところ	① 教科書の文法の説明内容が少ないので、テストの勉強をしようとした時に、文法が分からぬときがあった。	5人
	② もっと個人が発音する場を多くしてほしい。	3人
	③ 定期試験の評価が低いので、あまりやる気になれない。	2人
	④ 三年間続けてやるなら、講師の先生、メンバーの継続でやってほしい。授業の進め方などに慣れているし、あまり講師の先生は変わってほしくない。	2人
	⑤ もうちょっとゆっくり授業してほしい。	2人
	⑥ 5限目やめてほしい。	2人
	⑦ 中国のいろいろなことをもっと知りたいと思った。文化とか。	2人
	⑧ もう少し日常会話などを教えてほしい。	1人
	⑨ せっかくの少人数制なので、講義形式の授業だけでなく、いろいろな授業の形式をしてほしい。	1人
	⑩ 単語の発音のときに、先に学生に読ませて、後で先生が読むことについてだが、読み方が分からないから先に先生に発音してほしい。	1人
	⑪ 初級中国語に比べて、教科書の内容が浅いような気がする。	1人
	⑫ 「入門会話」なのに、文法とかが少し多く感じる。	1人
	⑬ 文法をもっと詳しく教えてほしい。	1人
	⑭ 教室用語をもう少しゆっくりしてほしい。	1人
	⑮ 「ピンイン」はそんなに多く書いたり、読んだりしなくていいと思う。	1人
	⑯ 先生の説明を聞いても分からぬ。	1人

第三章 中国語中級Ⅰ（検定クラス）の現状と成果報告

池田磨左文

2007年度中国語中級Ⅰ・Ⅱ（検定）の教材は、2005年度・2006年度に引き続き、コーディネーターである中山の指示により、日本中国語検定協会主催による検定試験の過去問題を基に、池田が作成した。

2005年度前期では、予習－授業（演習・試験）－復習の輪の中で学生自身にできるだけ「作業」をさせることにより学力を向上させることを図った。その結果、2005年6月に実施された第56回検定試験では4級合格者の顕著な増加が見られた。しかし、学生の予習・復習への負担が大きすぎること、教師が授業時間内で説明する時間が十分にとれないことなどが、学生・教師の双方から問題点として指摘された。

2005年度後期では、予習－授業－復習の輪はそのままに、予習内容を変更することにより学生の負担を軽減する措置を講じた。また、授業では、予習内容を違う角度から再度演習させたあと過去問題を解かせていたのを改め、過去問題を先に解かせたあとでその一部を発音させるようにした。これにより、教師が説明をより多く行なうための時間を確保した。2005年11月実施の第57回検定試験の結果は、3級合格者は多かったものの、4級に多くの合格者を出すことができなかった。3級合格者の多かった要因の一つに、前期の学習の蓄積のあったことが挙げられる。一方、後期に4級を受験した学生の多くは、前期には準4級に向けての学習を主にしており、彼らは4級に向けての学習の質・量がともに足りなかつた可能性がある。

2006年度前期では、教材・授業方法とも2005年度後期の試みを基本的に踏襲しながら、授業の進度を1/2程度に落とすと共に、教材をさらに簡素化して「予習」・「試験」・「演習」の3種類とした。「演習」は実質的に「予習」・「試験」の解説の一部となるものである。学習量の減少による学力向上の減速が懸念されたが、2006年6月実施の第59回検定試験では、4級においても一定の合格者を確保することができた。

2006年度後期においては、教材・授業方法とともに前期に倣った。2006年11月実施の第60回検定試験では、多くの4級合格者を出すことができたものの、3級に一人も合格させることができなかつた。分析の結果、リスニング問題の得点が合格基準点に少しの差で達しなかつた学生の多かつたことが主な原因であると判明したが、教材において同年6月実施の第59回検定試験から出題形式に一部変更のあったことを踏まえて改変をしておらず、これが得点を伸ばしてやることのできなかつた原因であることは否定できない。責任の大半は、教材を作成した池田にある。出題形式によって得点がある程度左右されることはやむを得ないと言えるかもしれないが、この授業科目の趣旨が学力を身につけさせることにある以上、どのような出題形式であっても一定の得点が得られるように教材においても授業においてもさらなる改善をしていかなければならないという要求を、試験結果から突きつけられた。「検定試験に合格することを目標としてはいるが、これは目的ではない。学習の目的は、社会的に評価され得る程度の中国語を身につけることにある。」（2006年度『シラバス』より）

2007年度前期、中国語中級科目に大きな改変があった。検定試験受験を主目的としないノーマルクラスの大幅な拡充と、検定クラスの2から3へのクラス数の増加である。検定クラスにおいては、準4級内容に4級内容を加えたクラス分け試験の結果により、すでに準4級内容が把握できていると思われる2/3の学生をその成績順に2つの発展クラスに入れ、準4級内容の学習がなお必要と思われる1/3の学生を基礎クラスの所属とした。教材・授業方法とも2006年度に基本的に倣ったが、2006年度後期の反省を承け、リスニング授業の教材内容については一部手直しした。2007年6月実施の第62回検定試験の結果は下の表の通りであるが、4級の合格率が50%に達しておらず、問題を残した。

なお、日本中国語検定協会から提供された資料によると、検定試験4級の平均点は、リスニング問題が70.6、筆記問題が58.9であったのに対し、本学中国語中級（検定）受講生のそれは、リスニング問題が66.9、筆記問題が56.6であった（遅刻によりリスニング問題の得点が0点となった学生を除く）。全国の受験者のリスニング問題の得点が高く筆記問題の得点が低いという傾向は従来からあるものであるが、本学中国語中級（検定）においても同様の傾向が見られる。検定試験4級の合格基準点がリスニング問題・筆記問題ともに60点であるにもかかわらず、全国の受験者における平均得点の差が10点以上もあることには、問題の難易度・合格基準点の設定に問題がないとも言えない。しかし、そこに中国語検定試験協会の求める水準が反映されているとするならば、我々としてもそれに対応していく必要がある。

中国語中級（検定）検定試験の合格者数と合格率（2006年度前期・後期、2007年度前期）

	3級		4級		準4級	
	第59回（2006年6月）	第60回（2006年11月）	第62回（2007年6月）	—	—	—
第59回（2006年6月）	1/3	33%	22/27	81%	26/27	96%
第60回（2006年11月）	0/14	0%	10/13	77%	—	—
第62回（2007年6月）	—	—	13/32	41%	12/13	92%

注：各級の左欄は「合格者数／受験者数」、右欄は「合格率」。

第四章 中国語総合クラスの現状と将来展望

和田知久

1. クラスの設定

中国語総合は、中国語中級I・IIを修了した3年次4年次の学生を対象とした旧カリキュラムの授業である。そのため当授業は、本年から導入されたばかりの共通教育科目（新カリキュラム）とは直接の関係を持たない。当授業のレベルに相当する授業が開講されるのは2009年度からであり、現在はそれへの移行期である。

本稿の目的は、当授業がどのように設定されており、運営されているかという現状を紹介する一方で、新カリキュラム導入時に開講されるであろう授業への展望を記すことにある。

当授業はKACでは、和田知久（水曜日）と于耀明（木曜日）とが担当している。筆者は非常勤講師であるが本年度で当授業を3年担当している。今年度からはKPCでも開講されている（担当

者：平坂仁志、上田なおみ）。テキストは前年に引き続き、子も執筆者の一人である『中国文化散歩』（白帝社）を採用した。当テキストは中国の文化や社会を平易で簡潔な文章で紹介しており、短文の発音練習や文法の練習問題を含んだ講読用のテキストである。両キャンパスの授業計画や使用テキストは共通であるが、授業の進行は統一していない。本稿は筆者が担当するKACでの授業に限定した内容であることをことわっておく。

本年度の授業計画を示すに当たって、シラバスの「主題と目標」欄には次のように記した（各項目冒頭の数字は本稿で取り上げるに際して付した）。

- [1] これまでに培ってきた基本的知識をもとに、読む・聞く・話す・書く能力を総合的にバランスよく向上させ、中国語検定2級の受検に備えて語学力の充実を図ります。
- [2] 中国の文化や社会にまつわる文章の講読を中心に、受講者の皆さんの希望により検定対策、時事ニュース、小説、映画や音楽なども併せて取り上げる予定です。
- [3] また本講義では、パソコンなどのデジタルメディアも有効に活用しながら中国語学習を進めていきたいと思っています。

つまり、以下の点に留意して授業計画を立てることにした。[1] 中級の検定クラスのように検定試験受検対策の問題演習に特化したものではないが、中級検定クラスが目標としている検定試験3級受検・合格のレベルを引き継ぐものに設定した。[2] 初級、中級と学ぶ中でほとんど触れることができなかった中国の文化や社会について学び、興味を持ってもらおうと上述のテキストを採用し、受講学生の希望にある程度沿うかたちで授業を運営してゆくため、採用したテキストが過重な負担にならぬような分量にとどめた。[3] 紙以外の媒体も用いて中国語に触れてもらうことを意図した。前年度には、Windows環境下での中国語入力や中国語ウェブページ閲覧をテーマにした講習会を中国語履修者全員を対象として行っており、参加した学生から一定の好反応を得ていたことと、前年度の総合クラスでは、担当者がネットワーク上にアップしたMP3ファイルを受講者各自がダウンロードして聞き取ってくる課題を出したり、中国語で書かれたニュースなどをウェブで閲覧したりするなど、たびたび紙以外の媒体でも中国語に触れることが授業レベルで成立していた。

ただ、不安もなくはなかった。昨年度後期中級検定クラスでは、11月実施の中国語検定で3級の合格者がゼロであったことである。このことが本年度の総合クラスの履修状況にどのような影響をおよぼすかは、授業計画立案当初から4月に授業が開講されるまでずっと担当者の不安材料となっていた。

2. クラスの実際

4月になり新学期が始まった。4月11日の第一回目の授業には10名の参加があった。ただしこの時点では履修の最終決定はなされておらず、最終的に7名の履修が決定した。オリエンテーションを兼ねて履修者にアンケートを取ってみると、全員が中級では検定クラスを履修し、4級は取得

していた。3級については3月実施のものを受検して結果待ちである者が複数いた（のち、合格者は1名であることが判明）。授業への要望としては、シラバスに中国語検定2級の受検に備えると謳ったこともあるってかほぼ全員が検定試験の受験対策を希望していた。

ただ、アンケートをもとに履修者たちと授業の運営について意見を聞いていると、少し気になることがあった。本来外国語を2年間学び、3年目も継続して学ぼうとする者なら、その言語の話されている地域や文化などについても興味を持つものであると予想されるのであるが、履修者たちは中国語の学習において検定受検以外には別段興味がなさそうなのである。中国に行ったこともなければ、今後夏休みなどをを利用して中国へ行ってみようという者も、テレビや映画などのメディアで取り上げられる中国の話題についても興味を持っている者もほとんどいなかったのには少々驚かされた。また実際の語学力についても、過去の検定試験問題を用いて模擬試験をしたところ、3級合格へはかなり学力が不足しているように見受けられた。

履修者にとって中国語を学習することの意義はどこにあるのか。担当者として授業運営のあり方を再検討する必要があると認識するにいたった。そこで次のような方針の下で授業を進めていくことにした。

- ・採用したテキストを講読しながら、3級受検に向けて毎回別刷りのプリントを用意し演習・解説することで対策とする。
- ・中国語学習の動機を維持するために、映画やミュージックビデオなどを利用して中国語圏の文化や現状についても極力紹介し、検定だけではない言葉の背景となるものについても興味を持ち理解を深めていけるようにする。

後者については、当初さほど興味を示さなかった学生たちも担当者が適宜解説を加えることで、映画や音楽などにも興味を示すこととなり、中国語やその話されている地域の話題が学生たちにとってより身近なものになってきているようであり、方針としては妥当であったと思われる。しかしながら、前者については、採用テキストの講読にも多く時間を割く必要があることから、それほど受験対策を充実させることができなかった。また、3級受検対策は昨年度の検定クラス履修時に行ったことの繰り返しになり、時として履修者たちの学習のモチベーションを低下させることにもなりかねず、運営上のジレンマに陥ってしまった。結果、6月の検定試験の結果は思わしくはなかった。

3. 将来展望

本年度の総合クラスは上記のようなクラスの現状と、新カリキュラムへの移行期ということもあり、試行錯誤を繰り返しながら運営している。ただ、前途に光明を見出せない状態ではない。

新カリキュラムの導入と併行して、初級クラスでは『みんなの中国語 第一步・第二歩』というテキストを新たに作成し使用はじめた。この初級テキストは従来使用してきたテキストの優れた点にも留意しつつ、中国語検定試験を視野に入れて学習事項を厳選し、まず必要なものを確実に身に付けることができるように編集されている。このテキストを用いる初級クラスでは、より効率的な学習が可能であるばかりでなく、時間的な余裕もできることになり、各担当者を通じて中国語の

話されている社会や文化についても折に触れて紹介されることが期待できる。また、同時に開設されている入門会話の授業の履修者にとっては、ネイティブ教員の創意に満ちた授業を通して、会話の実践的な練習のみならず、これまで以上に学生たちに中国語の背景についても興味を持ってもらえることになるであろう。そして、初級レベルのクラスを受けて新たな中級クラスも2008年度には開設され、その次に2009年度の上級レベルが想定されることになる。各レベルのクラスが連繋し、効果的な中国語教育を行うためには何が必要なのであろうか。

本学の初級履修者は約1400人であるという。中国語初級の履修者が1000人を超えているのは何もこの数年だけの突発した事象ではない。本学紀要掲載「神戸学院大学中国語教育の軌跡」(2006)によれば、1994年以来ずっと1300～1400人の履修者がいるのである。それが三年次の総合クラスになると10名にもおぼつかない。このような履修者の極端な先細り現象は是非とも解消されなければならない。そのためには初級段階ではいわゆる「詰め込み教育」は行わず、履修者に学習意欲を維持させるような授業内容や成績評価を行う必要がある。この点については、今年度から初級クラスで新テキストの導入や成績評価法が見直しされているが、中上級においても引き続き検討されなければならないであろう。また、中級クラスの人数面での増強も必要であると思われる。先に挙げた「神戸学院大学中国語教育の軌跡」によれば、中級クラスの履修者は2000年以来、120～150人程度であるという。ここでも「少数精銳養成」を目指すのではなく、「幅広く」学生を確保し、「興味深い」授業内容にすることが求められる。中級履修人数を初級履修者の半分とは言わないまでも、500人程度を見込んで授業を構成することは不可能なのであろうか。達成目標が多少低下するとしても、本学で中国語を学ぶ学生が増加することが内容面での充実に繋がると筆者は信じている。中上級クラスでは初級のように教科書出版社を通じて独自教材を開発出版して使用することはなかなか困難であるというが、使用する部数が増加すれば独自教材の開発も困難ではなくなるはずである。

特に中上級の開講規模を拡張し、独自教材の開発や初年次から三年次までのクラスが学習内容や学習目標において連繋することで本学の中国語教育はより効果的で有意義なものになるのではないかだろうか。

おわりに

中山 文

9月23日、1回生後期用テキスト「みんなの中国語 第二歩」が白帝社より無事に出版された。共通教育機構の中国語プログラムを新しい全学統一テキストでスタートしたいという筆者の念願が叶ったのだ。筆者ひとりの力では時間的にとうてい叶うはずのない無謀な望みだったが、執筆者メンバーの真摯な努力と協力者たちのおかげで、なんとかここまでこぎつけた。これまで力を貸してくれた人々へ、心より感謝の意を表したい。

共通教育完成年度には、中国語では以下のプログラムが立ち上がる。

1回生用：中国語初級Ⅰ・Ⅱ、入門中国語会話

2回生用：中国語中級Ⅰ・Ⅱ、初級中国語会話

3回生用：実践中国語、中国語講読、実用中国語会話

ここに見える全体像は教養総合コース時代のプログラムに近いが、本学受験生の偏差値、学生の気質、中国の社会的経済状況、日中の国際状況などは当時と大きく変化している。今後これらのプログラムの具体的な内容をどのようなものに創りあげていくのがもっとも効率的か。どうすれば学生の興味と中国語能力を引き上げることができるのかは、いまだ暗中模索の状況である。

現在千数百名が受講する全学の中国語教育をひとりの専任教員と約30名の非常勤教員で担当している。専任教員の定員増加がないかぎり、現場の仕事は非常勤教員の力にすがるほかはないのだ。これからも中国語担当者のチームワークを活かし、それぞれの経験を共有することで実りある教育をめざしていきたい。

(本研究は2007年度人文学部研究推進費による「中国語初級後期教材及び初中級教材の研究」の研究成果の一部である。)

(2007年11月20日原稿受付)